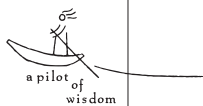


モーツァルトは
「アマデウス」ではない

石井宏
Ishii Hiroshi



Wolfgang Amadé Mozart

Ritter des goldenen sporns,
und so bald ich heürath, des doppelten horns,
Mittglied der grossen Accademie,
von Verona, Bologna, oui mon ami!

ヴォルフガング アマデ モーツァルト

黄金の拍車勲章の騎士にして
結婚すれば二本角^{*}の騎士
偉大なるヴェローナとボローニャの
学士院会員、そうとも ねえ 君!

(1777年11月22日付の手紙の署名)

*妻を寝取られた男の額には角が生えるという伝承

目次

序曲 名前の話 13

第一章 親からもらった名前 19

生涯に二回だけ使ったフルネーム

ザルツブルクを飛び出したモーツァルト

猥雑なベースレ書簡とカノン

フルネームを使った二回目の手紙

シギスムンドウス探し

ジーギスムント・フォン・シュラッテンバハ伯爵

ヨアネス・クリソストムスはどこから来たか

第二章

ヴォルフガングとアマデーウス・モーツァルト的

48

「アマデウス」は洗礼名に由来したのか？

「アマデーウス」と書かれた別の手紙

「アマデウス」はラテン語かドイツ語か

第三章

悪夢への前奏曲

56

大学を追放された父レーオポルト

一生消えることのないタブロー

七歳でヨーロッパ征服の旅に

レーオポルトの野望

女帝陛下の心変わり
ついにオペラの作曲へ

第四章 悪夢のドラマ 81

初めてのオペラ・ブツファ

ウィーンに吹き荒れる誹謗中傷の嵐

四面楚歌のレーオポルト

間奏曲 第一 《バステイアンとバステイエヌ》の怪 96

間奏曲 第二 ジュゼッペ・アフリージョ 102

第五章 イタリアの陽光 106

第六章

アマデーオ降誕

117

音楽の風は聖地イタリアから吹いた
オペラ界のアイドル「カストラート」
歌手の生産地だったナーポリとヴェネツィア
ボローニャやヴェローナの『音楽大学』
音楽史をリードしたイタリアの声の文化

失意のウィーンから陽光のイタリアへ
ヴェローナの新聞が賞賛の嵐
ドイツではヴォルフガング、イタリアではアマデーオ
天才少年トーマス・リンリーとの出会い
門外不出「ミセレーレ」を記譜
黄金の拍車勲章の騎士

第七章 ドラマの終わり

140

胸につかえる嫌な予感

マリーア・テレージアの裏芸

レーオポルトの誤算

潰えた夢

第八章

ウィーンの亡霊たち——陰謀・噂

148

女帝の死去

ウィーンに呼び出されたモーツァルト

大司教に突きつけた、最後通牒

ウィーンで訪れた最初のチャンス

宮廷詩人、ロレンツォ・ダ・ポンテ

日くつきの思想劇をオペラ化

陰謀を骨抜きにした《フィガロの結婚》

最後のオペラ《魔笛》

あの世からの使者

第九章

モーツァルトの死

183

モーツァルトの毒殺者

ダ・ポンテの『回想録』

「宮廷楽長、殺人を告白」

戯曲『アマデウス』第一幕、最後の独白

「アマデウス」でなければならなかったタイトル

第一〇章

ドイツ語圏に家がない

202

ザルツブルクへの嫌悪

モーツァルトを嫌ったザルツブルク
ウィーンではないどこかへ

嫉妬と悪意にさらされた不遇の日々

哀れな年俸の宮廷作曲家

無神経なドイツ人

フィナーレ アマデーオ、孤高の王国

222

悪口雑言は高貴な友情の証

第二のモーツァルト

間男の存在

唯一遺された宝物

アンコール
だれがアマデウスを作ったか

235

初めて「アマデウス」の名が載った出版物

実利実益を重んじたコンスタンツェ

「アマデウス」の欺瞞を突き止めた二人の学者

あとがき
245

蛇足
251

主な参考文献
256

巻末附録 モーツァルトの生涯の署名一覧
267

作品における署名／手紙における署名

本書に引用した文献や手紙、雑文などは全て著者の翻訳によるものです。
また、欧文資料はあえて原文のまま引用しました。

お断り

本書で「ピアノ」という言葉を使うときにはチェンバロ（クラヴサンあるいはハーブシコードと呼ばれる楽器）と区別しておりません。ピアノという楽器はチェンバロ系の楽器とは全く異なった発音のメカニズムを持つていて、一七〇九年（あるいは一一年）にフィレンツェの楽器職人クリストフォーリが発明したとされますが、これが多くの改良を経て実用化されるのは約六〇年後の一七七〇年代となったため、モーツァルトは少年時代にはクラヴサン系の楽器を弾いており、混用の時期を経てウィーン時代（一七八一—九一）には「ピアノ」と呼ばれる楽器を使っています。ただ、ドイツ語ではどちらもクラヴィーアという言葉で表され両者の間に区別がつきません。モーツァルトは両者を区別せず一様にクラヴィーアと呼んでいます。

またラテン語の読み方については古典的な読み方を採用しました。宗教音楽に使われるラテン語はイタリア語化した読みを現代のカトリック教会で採用しています。一八世紀の発音法はわかりませんが、敢えて古典読みを採用しました。

例

	イタリア訛り ^{なま}	古典ラテン語
agnus dei	アニユス・デイ	アークヌス・デイ
Regina coeli	レジナ・チェリ	レーギナ・コエリ
miserere	ミゼレーレ	ミセレーレ

序曲 名前の話

「モーツァルトの名前をご存知ですか」

今、かりにこんな質問を發したとすれば、クラシック音楽に興味のある方なら、

「ヴォルフガング」

「アマデウス」

「ヴォルフガング・アマデウス」

などと答えてくださるであろう。特に「アマデウス」は一九八〇年代に世界中でヒットした映画《アマデウス》のお蔭かげでポピュラーになり、今でもヴォルフガングよりもこちらのほうを先に思い出される方は多いかと思われる。この映画はモーツァルトとその生涯のライヴァルと目されたアントーニオ・サリエリというウィーンの宮廷音楽家二人を主人公に据えたもので、ふつうならこの種の映画はクラシック音楽の愛好家のみが対象となるところだが、ここに登場するモーツァルトが並みのクラシック音楽家の範疇はんちゆうに入るような人物ではなく、今様の

言葉で言えばハチャメチャな、極めてエクセントリックな行動をすることが意想外で、クラシックの映画という先入主を超えて幅広く人気を集めたものであった。お蔭でアマデウスという名前が一世を風靡ふうびすることになってしまった。今も当時を知る人なら、モーツァルトと聞けばアマデウスという名のほうを真っ先に思い出すことであろう。

しかし、私は今「モーツァルトはアマデウスではない」と言おうとしているのである。「え、そんなバカな……」という声も聞こえてくる。

念のために辞書に当たってみる。

広辞苑で「モーツァルト」を引くと、見出し語のモーツァルトの下に横文字で「Wolfgang Amadeus Mozart」と出てくる。これからすればモーツァルトの名前は Wolfgang Amadeus (ヴォルフガング・アマデウス) でまちがいないと言えようか。

もう一つ、固有名詞を多く収録している学研の『新世紀ビジュアル大辞典』を引いてみる(この辞典は外国語の固有名詞の正確な表記——たとえば日本ではゴッホと呼ばれる画家の名を、この辞典は初めてオランダ語のフィンセント・ファン・ホッホという読みで紹介した——の実績を持つ)。これで「モーツァルト」を引くと同じように「Wolfgang Amadeus Mozart」という横文字の綴つづりが出てくる。やはりモーツァルトの名はヴォルフガング・アマデウスであるようだ。

英語の世界では何と呼ばれているのだろうか。ためにしに研究社の『新英和大辞典』を引いてみる。同じでも「Mozart, Wolfgang Amadeus」と出ている。

英和ではなく英英の事典はどうかと思いつ『Encyclopaedia Britannica』に当たってみる。しかしここでも見出し語は「Mozart, Wolfgang Amadeus」である。

では本場のドイツ語の辞書ではどうか。手許てもとの小学館の『独和大辞典』を引いてみる。ここでは「Mozart」人名「Wolfgang Amadeus ヴォルフガング・アマデーウス」とある。

権威ある有名大辞典がこのようにモーツァルトの名はヴォルフガング・アマデウスであると書いているとなれば、「モーツァルトはアマデウスではない」と言う私は四面楚歌の孤立した状態になる。

困ったことだが、いずれにしても（あとで述べるように）このアマデウスというのは親からもらった名前ではない。日本流に言えば字あだなというところである。それらしいことを証明してくれる辞書もある。

『プチ・ロベール2』というフランス語の辞書で、固有名詞専門の辞典である。これによると「Mozart (Johann Chrysostomus Wolfgang Gottlieb, dit Wolfgang Amadeus)」というこれまでにない長い名前が出てくる。そのうちの前の四つは以下の第一章で述べるように、モーツァルトが親からもらった名前である。その中にはアマデウスは含まれていない。しかしそのあと

に、

dit Wolfgang Amadeus

というのがついている。これが曲者である。最初の dit というのは英語の said という過去分詞と同じもので「……と言われている」あるいは「……というアダ名である」という意味であるから、これに従うと、モーツァルトは「ヴォルフガング・アマデウス」という名で呼ばれていた」という意味になる。

しかし、

「モーツァルトはアマデウスと呼ばれていた」とすれば、それは事実には反している。字にしても、モーツァルトはアマデウスと呼ばれたことはないのである。

つまり、

世のあらゆる辞書に反して、生前のモーツァルトの名前はアマデウスであったこともないし、彼はアマデウスと呼ばれたこともないのである。

「そんなバカな！」

そう、事實は小説より奇なりというが、現在、洋の東西を問わず市井に出回っているすべての本が「アマデウス」を彼の名として認定しているのに反して、生前のモーツァルトは、アマデウスではなかつたし、

アマデウスと呼ばれたこともないし、アマデウスと自ら名のつたこともないのである。

それは変だ、と思われるに違いない。

権威ある辞書がすべてアマデウスであると言っているのはどういふことなのか。そう、現代の碩学せきがくと言われる人たちが皆、アマデウスだと言っているのに私一人が叛旗はんきをひるがえそうというのはなぜか。

——おまえ以外に「モーツァルトはアマデウスではない」と主張する人はいないのか。いません。まだ見たことはありません。

——世界に音楽学者はたくさんいるのに、だれも「モーツァルトの名前はアマデウスではない」と言う人がいないのはなぜか。

高名の学者であればその事実を知らないはずはないのですが、気づかない方もいるのでしようか。一九世紀の有名なケツヒエル・カタログの編集者であるルートヴィヒ・ケツヒエルの総目録 (Chronologisch-thematisches Verzeichniss) の表紙に書かれている名前は、ヴォルフガング・アマデウス^グではありません。およそモーツァルトを研究するほどの人ならこの本を手にしたことのない人はいないでしょうから、そこに書かれているモーツァルトの名を知らない人はいないはずなんです。

——それはどういふ名前なのか。

ヴォルフガング・アマデとなっています。

——アマデはアマデウスの省略形だろう。それでは同じではないか。

それが違うんです。

モーツァルトは一七七〇年（一四歳）以降、親がくれたヴォルフガングという名前に、イタリア人たちがくれた「アマデーオ」Amadeo という名前をくつつけて署名に使うようになった。

このアマデーオというイタリア語をドイツ語に直せばアマデーウスとならないことはない。だから、彼はそのドイツ語を使えば使えたはずなのに、一生にただの一度もアマデーウスという署名をすることはなかった（巻末に彼の生涯の署名の一覧表をつけましたのでご覧ください）。

なぜ彼がこのアマデーオという他人のくれた名前を愛して、一生の間自分の署名に使用しているのか。

それをドイツ語に直せばアマデーウスとなるのに、なぜ一度もそうしなかったのか。本書はこのミステリーののような難問を以下の章で解こうとするものである。